

天理大学雅楽部「2011 西安世界園芸博覧会」に出演

佐藤浩司

雅楽部は、奈良県及び奈良市の招請により、10月8日から14日まで、中国は西安で開催されていた「2011 西安世界園芸博覧会」に出演した。ところで、日本では、西安において博覧会が開催されていることについては、あまり知られていない。昨年上海で開催された博覧会については、日本からも参加し見学した人も多いと聞いている。正直、私もこのお話を聞いて初めて知った。

「2011 西安世界園芸博覧会」は、今年の4月28日に開会し、西安郊外にこのために設えられた敷地面積は418ヘクタールの西安世界園芸博覧会公園に、30の国と地域が出展し、期間中、世界各地の植物700種あまりや芸術品、珍しい動物などが展示され、去る10月22日に閉会するまで、のべ1,600万人の来場者があった。担当者は、愛知博を意識しているようで、広さは4倍であると自慢していた。ちなみに2005年に開催された愛知博は、「自然の叡智」をメインテーマに、「地球大交流」をコンセプトとして、120を超える国々が参加し、長久手と瀬戸両会場併せて約173ヘクタールに、3月25日から9月25日の185日の間、2,204万9,544人の見学者があった。確かに、会場の広さは約2.5倍である。日本からは、横浜市と奈良市が参加、日本庭園を会場に設けていた。奈良市の庭園は、枯山水で、日本から運んだという見事な松が2本、堂々と庭園を飾っていたが、何分鉢植えであったのが惜まれる。

この博覧会について、主催者は「1グリーンエンジン、2大家の創造、3時空の対話、4天意による良縁」の4つの特徴を挙げている。1は、いわゆる自然環境への配慮、2は建物や庭園の創設に、世界的に名の通った大家が当たったということ、3の時空の対話とは、会場となった広運潭は、隋唐時代、長安の運輸埠頭であったところであったところから、4つ目は、昨年から今年にかけて台北世界花卉博覧会が行われたことについて、「この2つの園芸界の盛会は時間の上で緊密につながり、リレー競争のように海峡兩岸の2つの都市を結んだ」として、テーマもうまく合致し、同じ理念、共同の目標をもって、2つの都市には「天意による良縁がある」というのである。

さて、雅楽部は、10日から12日まで午前1回、午後2回の1日3回、計9回の公演を、浣溪沙と名付けられた特設ステージで行うことになっていた。10月9日会場に入りリハーサル、10日3回、11日は雨天のため午前の公演は中止、午後も1回だけとなり、12日は晴れて3回と計7回の公演を行った。舞台は、まず、舞台中央正面に設置された大型液晶画面を使って、「おもてなし」をメインテーマに、奈良公演の鹿寄せや、東大寺の大仏、奈良ホテル、奈良の地酒等、奈良を映像で紹介した。つぎに、月ヶ瀬の和太鼓グループが、現地に伝統的に行われている和太鼓の曲を3曲披露し、つづいて、昨年平城遷都1300年のマスコットキャラクターとして人気を得たセント君が、セント君のテーマ曲にのって踊り、最後に雅楽部が、舞楽「抜頭」を披露した。

観客席は屋外で、客席として椅子が50程度おいていた状態であるが、ステージには、音響と照明の機材が、しかもかなり専門的なものが設備されており、係員も訓練が行き届い

ていた。公演についてどのような宣伝がなされているのかは分からないが、時間になると三々五々人が集まり、椅子席の後ろの広いスペースが観客で埋まった。司会者が、舞楽について、中国から日本に伝わり、中国では絶えてなくなったが、日本では今でも伝えられていると説明すると、興味津々、熱心に鑑賞していた。舞人が退場し、演奏が止むと心温まる拍手で、会場が包まれた。

最終日の12日、舞台がはけてから、奈良県が準備した日本庭園に行き、燈火会よろしく、LEDの電球を庭に並べ、即席で雅楽の演奏を行った。夕闇せまる中、仄かな明かりに照らし出された松の緑、静かに流れる笙、箏、龍笛の音に、しばし長安と呼ばれた時代にタイムスリップしたかのようで、道行く人も足を停め聴き入っていた。短い滞在期間ではあったが、西安歴史博物館や始皇帝陵の見学があり、充実した公演旅行であった。

なお、担当者の話によると、閉会后会場は恒久的な公園に改造され、来年4月に再開園する予定とか。また、同様の博覧会は、明年5月12日から8月12日までの3ヶ月間、大韓民国全羅南道麗水市において、「2012年麗水国際博覧会（麗水万博）」として開催される予定であるという。

立正大学「ケアロジーを創る」連続講演会に参加

金子珠理

<東日本大震災の「悲惨・悲嘆」の只中に「ケアの思想」の錨を！>という副題の下、大震災を哲学・倫理学・宗教・医療の場面から思想的に深く問い返すことが、標記連続講演会の主旨である。10月15日、その第2回「キリスト教的生命倫理学から災害を考える」（立正大学教授・村上喜良氏）に参加した。

前半において村上氏は、科学的問いと宗教的問いとの違い、「私」の自的・他者的・時間的側面、人間と自然との関係、愛する者達との死別における事実的層と意味的層について述べた上で、スピリチュアル・ケアの意義と注意点を指摘した。後半のテーマは、大震災をめぐるキリスト教における神義論であった。

村上氏によれば、7歳の少女エレナがローマ教皇ベネディクト16世へ発した質問「なぜ子供たちはこんなに悲しまなければならぬのですか？」に対し、ノアの洪水やソドムの滅亡などを引き合いに出し震災が人間の傲慢に対する神の罰であると回答は間違いであり、むしろ義なる者に災いをなす理不尽な神（ヨブ記）という側面を考えねばならないという。ヨブへの答え方として、「神以外に義と言えるものはないにもかかわらず、自らを義人と考えるヨブは傲慢の罪を犯している故に神がヨブに災いを与えることは神の正義である」というのは実際多くの教会で語られているが、村上氏はこれを批判する。村上氏は、ベネディクト16世の答えである「神の不可知論」（神のすることは人知を超えているので理由は分からない）をさらに補足し、それにもかかわらず「神の為されることには必ず意味があると信じ、勇気をもって悲しみを受け入れ、必ず魂の癒される時がくると希望し、互いに受け入れ気遣うこと」（信仰・勇気・希望・愛）の必要性を強調する。この姿勢はキリスト教に限らず、宗教に共通するものであると指摘し、現在神がしていることはスピリチュアル・ケアを通しての「共に苦しむ」という形での「愛」とであると、結論づけた。

第12回宗教と倫理学会学術大会に出席

堀内みどり

龍谷大学アバンティ響都ホールを会場に、「スピリチュアルケア、グリーンケア」を大会テーマとして、10月22日開催された標記学術大会の公開講演では、「村田理論」で知られる村田久行氏（京都ノートルダム女子大学）が、「スピリチュアルケア—生きる意味への援助—」と題して講演した。

村田氏はスピリチュアルケアとは、スピリチュアルペインをケアすることであると、スピリチュアルペインを「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」と定義し、それは時間性、関係性、自律性を、死に際し喪失することに起因する。すなわち、時間存在である人間は、死によって将来を失い、現在の無意味・無目的によって“痛む”ことになる。また関係存在である人間は、死によって他者との関係を失い、自己存在の意味喪失・空虚・さびしさに苛まれる。さらに自律存在である人間は、死によって自立・生産性を失い（自律を喪失）、無価値・無意味・依存・負担を感じる。それゆえケアの指針は、喪失からの回復を援助することにあり、ケアは関係性に基つき、傾聴や共にいることなど関係の力で苦しみを和らげ、軽くし、なくすることとされる。そして「援助的コミュニケーション」について解説された。

「一歩園自然セミナー」の講演会と観察会に講師として参加

佐藤孝則

11月6日、北海道釧路市の釧路プリンスホテルで、(財)前田一歩園財団主催による「一歩園自然セミナー」が開催された。セミナーのタイトルは、「キタサンショウウオは凍っても死なない、ってホント？ —まだまだ知らないキタサンショウウオの生態のナゾ—」で、私は10時から約2時間、講演した。



キタサンショウウオの生態について講演する。
釧路プリンスホテル「北斗の間」にて。

約30年間の調査結果をもとに、知られざる本種の生態や遺伝情報について報告した。とりわけ、これまで定説となっていた本種の北海道への渡来時期が数万年前の最終氷期ではなく、むしろ180万年前に北海道からサハリンへ、90万年前にサハリンから大陸へと分布を拡大していったこと、また北海道に分布するもう1種、エゾサンショウウオは日本に広く分布する小型サンショウウオの中では最も古いタイプで、キタサンショウウオと1,500万年前に分化したという最新成果を報告した。

午後は13時30分から約1時間、釧路湿原で野外観察の参加者約60名と越冬直前のキタサンショウウオを観察した。

第10回教団付置研究所懇話会・年次大会

深谷忠一

第10回教団付置研究所懇話会・年次大会が、11月7日、東京・代々木の神社本庁総合研究所において開催され、本研究所所長の深谷忠一と、天理やまと文化会議の白木原嘉彦議長が参加しました。

この懇話会は、日本の各宗教教団付置の研究所が、平和、人権、環境、生命倫理等から家庭・学校教育の崩壊、種々の青少年問題、倫理の荒廃、そして宗教的価値観の喪失など多くの問題に対して、それぞれの教義・世界観を基にしながら、現代社会に開かれた教団たらしめるべくどのような努力をしているのかについて、相互に情報を交換し、それぞれの立場を尊重しつつ協力できる可能性を探ろうとするもので、教団の差をこえて、日本社会に「真の宗教性の復権」をもたらそうというものです。

この懇話会の平成14年9月の発足準備会の参加団体は、大本教学研鑽所、孝道教団仏教交流センター、金光教学研究所、浄土宗総合研究所、浄土真宗宗教学研究センター、神社本庁教学研究センター、真宗大谷派教学研究センター、曹洞宗総合研究センター、天台宗総合研究センター、辨天宗教理研究室、NCC（日本キリスト教協議会）宗教研究所、立正佼成会中央研究所等であり、当おやさと研究所も（教団付置ではなく天理大学の付置研究所であるので）オブザーバーという立場で当初より参画していますが、現在では参加24団体（うちオブザーバー5団体）に拡大しています。

今回の年次大会では、金光教学研究所、立正佼成会中央学術研究所、曹洞宗総合研究センターの各研究員からの発表に続いて、第10回目の節目の大会を迎えての記念鼎談が、設立に関わった雲井昭善、石上善應、奈良康明の3氏によって行われ、最後に次年度の大会を天津市の天台宗総合研究センターで開催することが発表され散会しました。

グローバル天理

第12巻 第12号（通巻144号）

2011（平成23）年12月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杵之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan